

あの高野岩三郎が主張していたように共和政にしてしまうのが、一番、民主主義
 になっているんじゃないか。そうまくしたてられても、何も反論できないことになりませ
 ずでしょう。

専制に対抗するのが民主主義だ、などという古代ギリシアの「テオクラティア」
 のイデオロギーを受け入れているかぎり、それはいつでも簡単に共産主義者たちのブ
 ロパガンダと重なり合ってしまうのです。それをふせぐには、民主主義イデオロギー
 に対するしつかりとした理論武装をかためる以外にありません。

岡崎 民主主義に反対するしつかりとした現実的な理論武装なるもの、つまりアタヤマ
 が言っている民主主義のアンチ・テーゼが、いくら探しても見出し得ないところが問
 題なのでしょう。

下から上を批判するのがその本来の性質である民主主義というものが、今や伊藤博
 文の表現を借りれば、「亦皆^{かた}寰宇^{かんう}の間に行はるゝ風気の被る所、譬^{たと}へば猶^{なほ}雨霜^{うしやう}ふて草
 生^{くさ}するが如し。深く怪しむに足らざる也」であって、それに抵抗することは無益であ
 り時間の無駄だということなのです。

明治十四年のあの時点で、後醍醐^{ごたいこ}天皇の建武の親政にもどすことも、薩長専制を続
 けることも、大勢上不可能となっていたというのが伊藤博文の判断で、それは正しい
 判断だったと思います。

だから、日本は民主主義であり、民主主義は必然的に反権力主義的である、という
 ことを身件として受け入れた上で、日本国民の安全を守るにはどうしたらよいかと
 いうことです。それが、『戦略的思考とは何か』以来の私の問題意識です。

長谷川 まあ、私自身は、その「民主主義に反対するしつかりとした理論武装」を、
 あの『民主主義とは何なのか』のなかで試みたつもりだったのですが……。

■「日本国憲法」は、日本の近代史における最大の汚点である

長谷川 こうやって明治以来、戦後の日本の現在にいたるまでの政治の歴史をふり返
 ってみて、政治というものが困難でなかったような時は一度もなかったのだというこ
 とがわかりますね。単に「クリーン」な政治ならばよいかと言つと、決してそんな
 ものではない。「クリーン」な政治家は、金権政治家以上にすからい手を使ってラ

イバルを蹴落としていたりしています。外からの脅威があり、経済の波があり、天災があり、その中をものがき、ものがき、なんとかやってきたのが日本の政治で、それはまた決して日本一国のことではない。チャーチルの言った“in this world of sin and woe”という言葉は、古今東西の政治の現実にあてはまる言葉だと思えます。

ただ、そのなかでも、戦後の日本の政治を大きく歪ませている要因がある。それは、日本が戦争に負けたということです。第一章で、青年期に祖国が戦勝した経験をもつ世代からは偉大な人間が輩出する、というお話がありましたね。これが本当に法則としてあてはまるかどうかは、古今東西の偉人をならべて統計をとってみなければ正確なところはわからないでしょうが、逆の話としては、非常によく解ります。戦勝の体験と敗戦の体験と、体験の重さを較べたら、敗戦の体験は百倍くらい重い。そして日本の戦後は、その敗戦の重さを、「臥薪嘗胆、次には絶対勝つてやるぞー」という将来へのバネにすることなく、占領者たちの注ぎ込んだ「民主主義」イデオロギーにことよせて、自虐と反省と謝罪というかたちで背負い込んでしまった。

しかも、その毒は、時がたつほど日本人の心にしみ込んで、日本人の精神そのもの

を溶解させています。

これをもう一度たて直すのは、容易なことではありません。しかし、なんとかしなければならぬ。私が憲法を正しく作り直さなければならぬと言つのも、そのための一歩としてなのです。

日本国憲法というものが日本の近代史における最大の汚点であることをはっきりと見つけ、そこに盛り込まれた民主主義イデオロギーの虚構をあばき、われわれの「建国ノ体」にもとづく憲法をしっかりと作り直すこと——地味なようでも、これ以外の正道はないだろうと思つています。

■平成十七年六月に提出した憲法前文の岡崎私案

岡崎 全く賛成です。敗戦の結果として押し付けられた今の憲法で、内容的に改正すべき箇所はどこかと言うと、各条文よりも前文だと思えます。前文に表現されている、いわゆる憲法の本質が、諸悪の根源です。日本という国家の地位が低すぎて、国際社会の善意の地位が高すぎます。やはり国家の歴史と伝統が最正面に出るべきもの